

判官館のアイヌ文化を知る その1

❁ ピポクとシャクシャインの最後

判官館を海側から眺めると、ゴツゴツした岩壁の姿が目立ちます。昔、アイヌ民族はこの付近を「ピポク」と呼んでいました。これは「岩の陰」の意味があります。新冠と呼ばれる前は、ピポクの地名がこの付近を指すポピュラーな呼び名だったようです。

江戸時代、シベチャリ（現新ひだか町静内）のアイヌ民族であるシャクシャインと蝦夷地を統治していた松前藩との間に戦いが起こり、これを「シャクシャインの戦い」といいます。

最初はアイヌ民族同士の争いでしたが、やがて和人との戦いに発展し、歴史に名を刻むような大きな争いへと発展しました。寛文9年（1669年）、松前藩はシャクシャイン側に和睦を持ちかけます。しかし、これはだまし討ちで、祝宴を開きアイヌ民族側が酔うのを見て襲いかかり、長であるシャクシャインは倒され、シベチャリの砦も焼き払われてこの戦いが終焉します。

- このシャクシャインが最期を迎えた場所がこの「ピポク」（判官館）だったという記録もあります。その後、松前藩はアイヌ民族への扱いを一層厳しいものへとしていきます。



❁ 「チャシ跡」の謎

アイヌ民族に関連する遺跡に、「チャシ跡」というものがあります。「チャシ」はアイヌ語で、砦・館・柵などいくつかの意味がありますが、遺跡では主に「砦」のことを指します。主に高台の場所に、壕（ごう）というくぼみを掘り、漁の見張りや交易の拠点、祭事の場、防塞など、さまざまな使い方があったようです。



明和のアクマツ川付近にあるチャシ跡



判官岬にある「ピポクチャシ跡」

新冠町内には、43カ所の遺跡がありますが、チャシ跡が残っているのは数カ所しかありません。その内のひとつが判官館にある「ピポクチャシ跡」になります。この遺跡は、太平洋や新冠市街地を望める「判官岬」にあります。岬の先に壕のようなくぼみが見えますが、アイヌ民族が掘ったものなのか、自然に崩れたものなのかははっきりしておらず、まさに「謎のチャシ跡」となっています。しかし、日高町門別方面のアイヌ民族であった「オニビシ」のチャシが判官館にあったという記録もあり、謎ながらもロマンあふれる場所となっています。

特集 新冠とアイヌ文化を知る

今だから知る「新冠とアイヌ文化」

平成31年4月にアイヌ施策推進法が成立し、令和2年7月には、白老町にウポポイ（民族共生象徴空間）が開業しました。

当町では、シャクシャイン伝説が残り、アイヌの無縁者が眠る納骨堂があり、今なお、多くのアイヌ文化の歴史が語り継がれ、民族にとっ

て由緒ある判官館に新冠アイヌ協会の活動拠点となる、多機能型交流施設「ポロシリ生活館」を建設しています。

広報にいかっぶでは、今話題の「アイヌ民族とアイヌ文化」について、もっと知りたい、理解したいというテーマで特集していきますのでぜひ、ご覧ください。

❁ アイヌ民族とアイヌ文化とは？

日本では、1万年余り前から2千年前までを「縄文時代」と言います。北海道でも縄文人が住んでおり、新冠においてもその頃の遺跡がたくさん残されています。狩りや漁、採集をして生活をしていました。その後、1500年ほど前から800年前のことを、北海道では「擦文（さつもん）時代」といいます。この頃、本州では奈良や京都に和人の政府ができています。北海道の擦文人は、和人から手に入れた鉄製品も使うようになりました。

大昔の北海道は、大自然に囲まれて生活をしていたとともに、和人文化が少しずつ伝わってきて時代が流れていきますが、やがて北の大地独特の文化が形成されていきます。これが「アイヌ文化の時代」（アイヌ文化期）です。北海道の時代区分では、800年ほど前から百数十年前までを指しますが、現在においても子孫の方々を中心にその文化の継承が続いています。



アイヌ文様が刺繍された民族衣装



平成26年11月29日にレ・コード館で開催された「アイヌ民族文化祭」の様子

アイヌ文化を受け継いだ人々である「アイヌ民族」は、古くから続く狩りや漁、採集を行うとともに、和人から交易によってさまざまなものを手に入れて生活するようになりました。日本語とは異なる言語である「アイヌ語」を使い、自然界のすべてに魂が宿るとされている「精神文化」、祭りや家庭での行事などで踊られる「古式舞踊」、独特の「文様」による刺繍や木彫り工芸など、固有の文化を発展させてきました。

❁ 新冠とアイヌ文化

新冠においては、縄文時代からアイヌ文化期の「遺跡」が43カ所も残っています。アイヌ文化期の代表的な遺跡に「チャシ跡」というものがあります。これはアイヌ民族が地面にくぼみを掘り、漁労や狩りの見張り場や、外敵から身を守る砦のように使っていたとされており、新冠でもこの「チャシ跡」が数カ所残っています。

また、江戸時代の頃には、新冠でもいくつかのコタン（集落）があったことがわかっています。現在の高江、朝日、大富、明和、若園などにコ

タンがあり、71軒、339人のアイヌ民族がいたという記録があります。

生活は狩猟や漁労、採集といったことをしながらも、判官館に「新冠会所」という和人とアイヌ民族が交易をする所があったことから、男性は海辺での漁業にも携わっていました。女性は樹木の繊維で作る衣服のアットゥシやゴザを編んでいました。これらの産物は自分たちで使うとともに、会所などで物々交換したり、貨幣でも取引されていました。